

平成30年度 第2回徳島県文化創造審議会 議事録

I 日 時

平成30年10月26日（金）午後3時から午後4時40分まで

II 場 所

徳島県庁10階大会議室

III 出席者

【委 員】20名中13名出席

桐野豊会長、吉田和文副会長、阿部曜子委員、有内則子委員、大井美弥子委員、大石雅章委員、久次米順子委員、佐々木尊委員、佐藤勉委員、鈴木アヤ子委員、森恵子委員、山下徹委員、四十宮隆志委員

【徳島県】

板東安彦県民環境部長、森口浩徳県民環境部次長、
吉成浩二県民文化課長、木野内敦教育委員会教育文化課長、
喜羽宏明県民文化課あわ文化創造担当室長ほか

IV 次 第

1 開会

2 開会あいさつ

3 議事

(1) 「徳島県文化芸術推進基本計画（仮称）」の策定について

(2) 意見交換

(3) その他

4 閉会

V 議事の概要

(会長)

それでは、早速議事に入りますが、前回、第一回審議会において、徳島県の文化に関する意識調査について、回答者の年齢分布や地域分布等についてご質問がありました。そこで改めて、調査の実施方法などについて、事務局から説明をいただきます。

(事務局)

前回、第一回審議会におきまして、県民の文化に関する意識調査の実施結果をご報告させていただいたところです。先ほど、桐野会長からもございました通り、前回審議会におきまして、複数の委員の方から、回答者の年齢や住居地域についてのご質問をいただきまして、その状況についてはご回答させていただいたところですが、このアンケートの制度概要につきまして、少し分かりやすく説明してはどうかというお話もございましたので、少しご説明をさせていただきます。

「徳島県の文化に関する意識調査」につきましては、「オープン徳島eモニターアンケート制度」を用いまして実施をいたしました。この制度につきましては、平成15年度まで実施しておりました「県政モニター制度」を見直し、平成16年度から主にインターネットを利用して県政についてのアンケートを行っているところです。

アンケートにご回答いただくモニターの方々につきましては、原則としてインターネットを利用してアンケートに回答できる方、徳島県内に居住する18歳以上の方で、国又は地方公共団体の議会議員及び職員でない方を、一般公募の方と市町村からご推薦をいただく方、それぞれ約100名ずつ計200名の方にご回答をいただくものとなっております。そうしたことで、前回ご説明させていただきました通り、十代等の若い世代の方々のご回答は少ない状況でございました。

そのため、お手元に参考ということで、1枚の資料をお配りをさせていただいております。「徳島県総合計画審議会若者クリエイト部会平成30年度若者意見とりまとめについて（文化に関する抜粋）」、こちらの資料をご覧くださいと思います。

この資料につきましては、県の総合計画の策定に向け、高校生や大学生からのアンケートを、平成30年5月から6月にかけて実施をいたしまして、約1,900名の方々からいただいた回答、また7月に県内の3箇所、東部、南部、西部地域におきまして、高校生95名、大学生9名等、約100名強ぐらいの方々から意見をいただきとりまとめたもの、その中の文化にかかる部分を一部抜粋したものです。

文化のみを対象としてのアンケートではございませんので、あくまで参考という形ではございますが、内容について少しご報告をさせていただきます。

高校生、大学生が思い描く、目指す、描く、徳島の将来像としては、郷土を知ることによって徳島スピリッツが生まれるということで、子供たちが徳島の自然や歴史、「阿波藍」「阿波人形浄瑠璃」「阿波おどり」「ベートーベン・第九」など、阿波の文化に親しみ、郷土に誇りを持ち、それを育ててきた徳島を大切に思う気持ちが育まれている、目指す将来の姿ということで、徳島を大切に思う気持ちが育まれているということ、またやっぱり素敵ということで、徳島の阿波文化でございますとか「徳島マラソン」や「マチ★アソビ」等徳島発のイベントなど、自然、食、文化、遍路文化等、脈々と受け継がれたおもてなしの心が、多くの人に評価されて観光客を引きつけているような徳島の状況。

また、「阿波おどりの聖地」ということで、徳島が阿波おどり発祥の地、阿波おどりの聖地として、改めて脚光を浴びている姿。そして、「徳島の芸術文化が熱い」ということで、子供から大人まで、芸術や伝統文化への理解が深く芸術活動を行う心豊かな社会、こうした社会が描かれているそのために施策の方向性として、子どもを育む地域力の強化ということで、学校や地域が連携し、「阿波おどり」をはじめとする、徳島ならではの文化やスポーツ等の多様な体験、幅広い年齢層の集団の中で学び合う多くの機会を提供できるよう学校、事業所、地域のつながりを強化していく。

また、芸術文化がいわゆる習慣づくということで、芸術文化をより身近なものとして感じるための、芸術や伝統文化に関するイベントや個展が開催される、そうそうしたものが促進される。

それで、徳島県内だけで開催されるだけでなく、いわゆるAIやIOTを活かしまして、県外で行われるようなものも、例えば、徳島でもサテライト会場としてそうしたも

のを体験できるような、そうした政策の方向性のようなものがまとめられたところでございます。以上でございます。

(会長)

前回の調査で、今の説明にありましたように18歳以上の県民を対象に、この「eモニター調査」をやったので、若者の意見があまり反映されていないかもしれないということで、それを補う意味で、この若者クリエイティブ部会での若い人、高校生や大学生等の意見を集約したものもあるということ。

それから、地域の偏りは「eモニター」の半数の約100名が、市町村からの推薦なのでどこかの市や町が全く抜け落ちているといったことはないという状況だとわかりました。そういうことですので、ご了解いただければと思います。

引き続き、本日の主題であります、「徳島県文化芸術推進基本計画（仮称）の骨子」について審議に入りますが、何かたたき台となるようなものがないと議論がしにくいかなと思って、大変僭越ですけど私の方で、ちょっと取りまとめましたものをお配りしております。その内容について事務局から説明をお願いします。

(事務局)

お手元にお配りしております「徳島県文化芸術推進基本計画（仮称）の骨子案について」の資料をご覧ください。会長からもお話がございましたが、先般の議論を踏まえまして、会長とご相談をさせていただきながら、骨子という形でまとめさせていただいております。

あくまでたたき台としての資料ですので、これに基づいてご意見を賜ればと思います。

1枚めくっていただきまして、「徳島県文化芸術推進基本計画（仮称）策定へ必要な視点」ということで、まとめさせていただいております。これにつきましては先般の今回の会議で各委員の皆様から、ご示唆に富んだご提言・ご意見を賜っておりますので、そういったことを踏まえまして、これを何点にまとめるのかというのも一つの議論ではあるんですけども、まあそういうことを言うておりますとなかなか議論が進みませんので、ここは便宜的に5つの視点ということでまとめさせていただき、阿波文化を取り巻く課題の解決を図り、発展に導くための、基本計画策定に必要な5つの視点という形で記載しております。

視点1につきましては、前回、アンケートの中でも活動する場がないですとか、あるいは機会が少ない、施設が少ないというようなお話もございました。それから、委員のご発言・ご提言の中でも、子供たちが文化に触れ合うきっかけが少ないとか、そういうところが大事であるというようなお話もありましたので、県民の文化力を向上するために、文化活動を「鑑賞する」「体感する」、あるいは「発表する」機会の一層の充実を図っていく必要があるというように書いております。これを端的に、「県民主役のあわ文化を推進していく」ということでまとめさせていただいております。

視点2につきましては、前回の審議会の中でも、人形浄瑠璃の「座」が継承されていることが非常に重要だというようなご意見もありましたし、あるいは、次世代、どういう風に担っていくか、あるいは、文化を守り続けている方にもスポットを当てていくこ

とも大切だというようなこともございました。ですので、若い方々に文化を担ってもらい、そういう観点をに入れていくということで視点2につきましては、阿波文化を継承するとともに新たな文化の創造へ若い人材を育成し、担い手不足を解消していく必要があるということで、端的に「阿波文化の担い手育成」というようにまとめさせていただいております。

視点3ですが、ここからは文化の発展形の形になっていくわけですが、昨今の人口減少の中で疲弊する地域を活性化するために、例えば前回の会議の中でも、合唱を通じて地域の中と溶け合って一緒に地域を盛り上げて行ったというようなお話もございましたし、あるいは今、祖谷の方にですね、たくさん外国からインバウンドの皆さんが来られていて、景観ですとか、景勝地ですとか、あるいは古い街並み、そういったものを愛でる、愛するそういう気持ちで日本にたくさん人が来て、それが地域の活性化につながっているというようなことで、この人口減少に伴い疲弊する地域を活性化するために、その地域に根ざす文化の力を、交流人口とか関係人口の拡大を図る起爆剤として利用する必要があるのではないのかということで「あわ文化息づくまちづくりの推進」ということで書いております。

視点4につきましては、他県の事例を引き合いに出されて、漫画とかアニメを通じて、新潟県や鳥取県が活性化をしているというような事例もお話をいただいております。そうした御意見、あるいは藍のこれからの発展型みたいなものについてもたくさん意見をいただいたと思います。そういうことで、文化と経済の好循環、伝統文化や文化財、景観などを商品開発や観光誘客に積極的に活用していく必要があるということで「あわ文化の力を積極的に活用」というような形でまとめさせていただいております。

視点5につきましては、実は、会議の中でもたくさん意見が出たのではないのかと思っておりますが、デジタルアートと襖絵の融合ですとか、あるいは音楽の中で浄瑠璃をすとか、あるいはLEDを使う、3Dプリンターを使う、アニメと能との融合で「マチ★アソビ」の影響で活性化したというお話もございました。それで、オリパラに向けての情報発信の重要性ということも、多くの方からご意見をいただいたところでございまして、「あわ文化」のさらなる発展や「4大モチーフ」、「あわ三代音楽」を初めとするレガシーを国内外に発信するとともに、伝統文化とメディア芸術の融合など新たな価値を創造する必要があるということで、「あわ文化、ブランドの発信、創造」ということでまとめさせていただいております。

この5つの視点に基づいて、基本計画はどのように取り組んでいくかということをお3枚目のページに描いております。5つの視点を基本的な方向性にとということで、さらに発展させていくために推進力となるということで、頭に「未知なる」というキャッチをつけさせていただきまして、今を超える、今ここには無い新しいものをどんどん生み出していくというような発想で、「未知なる価値！みんなで創る「あわ文化」」「未知なる魅力！作る、育てる「人材・才能」」「未知なる創生！文化の力で「まちづくり」」「未知なる融合！文化と経済との「好循環」」「未知なる展開！「あわ文化」ブランドの創出」ということの5本にまとめさせていただきました。

この5本を通じて、目指すべき徳島の姿として、「未知なる世界に羽ばたく文化立県とくしま」というのを方向性の中で見出していただければと考えております。以上、たたき

台にはなりますが骨子案についてご説明をさせていただきました。よろしくお願いたします。

(会長)

5つの視点に基づく基本的な方向性というものを、骨子としてお示しいたしましたが、これにつきまして、本日はご自由なご意見をお伺いしたいと思います。どなたからでもご発言をお願いいたします。

特に今すぐという方がおられないようですので、前回同様に、順番に各委員からご発言いただきたいと思います。前は時計回りで御発言をいただきましたので、今日は反時計回りで行きたいと思いますのでどうぞよろしくお願いたします。

(委員)

壮大な話なので、どこから切り込んで行けばいいか、ちょっと私、迷ってるところではあるんですが、基本的に「未知なる」というところを、ポイントに置くということでしたので、これも伝統とはある意味相反する要素でありますから、そこから離れたところからアプローチするという、そういう視点が必要かなと思っています。

「あわ文化」、徳島ということなんですけど、今、ネット社会になってきますと、あまりそういう垣根ってものは、これからは、どんどんなくなっていくんじゃないかなという風に見通しはもってます。ボーダレスって言うんですけど、「4大モチーフ」、「あわ三大音楽」というところが、いったいどこまで浸透しているのかなというところが一番の最初のきっかけかなと思っています。

「4大モチーフ」「あわ三大音楽」というのが、若い人に、おそらくあまり根付いてないような気がします。やはり、その若い人っていうのは、私もそうでしたけど、その時代、年代ごとに受けるものっていうのが、それ以降、一生の人格等の形成のベースになるものなので、伝統というものとは全く異質なものと考える必要があるかと思っています。

「未知なる」というところがポイントということでしたので、前回、私、他の県のその文化と言いますか、観光誘致とかそういった面でちょっとお話をさせていただいたことがあるんですけど、やはりまあ外へ出ていくということ、徳島県外に行って徳島をPRするというそういう体制づくりというか、何かそれができればいいかなと思っています。

(委員)

前回、所用がありまして出席できませんでした。初回の議論、私も議事録で読まさせていただいただけなので、すぐに分からないところもあるんですけども、これ具体的にこの骨子というのが、基本計画というのが出て来て、これができた段階でそれを担う主体は、どこが仕事をと言ったらおかしいんですけども、主体はどこになるんですか、これまずそもそも。

(会長)

私の理解では、いろんな文化を担っている団体とか、人がいますよね。そこの活動を

県が調整して、総合的に、違った文化芸術のインタラクションで、新しい物を生み出す、そういう場を作っていくだろうと私は思っているんですけども。

(委員)

私、去年の6月にこちらに来てから、今は文化振興財団にもいろいろ顔を出させていただいておりますし、社会教育の方でも委員やらせていただいております。それに文化の森の徳島県立21世紀館協議会というのにも私入ってます。そのほかにも、色々あるんですよ。だけど、正直言ってじゃあ、私そういうことやってるから、パンフレット送ってもらったり、招待券送ってもらったりするんですけど、うちは放送で、特にこの間から人形浄瑠璃についてたくさん、関連の番組だとか企画も出してるんですけども、実際、私一市民になってから、僕はアンテナを張ってるつもりなのに、全然、徳島の文化というものが引っかかってこないんですよ、正直言うと。

誤解がないようにいいますと、私、大阪にいた時は文楽にはまって、しょっちゅう日本橋の国立文楽劇場に通ってました。東京に行った時は、ほぼ毎月歌舞伎座に昼夜行って、本当に、そうしたものが大好きな人間なんですけど、こっちに来てこの仕事やって立場がこうだから色んな情報が入ってくるけれども、ふっと座ってるだけだとここは何一つ、徳島というのは。

前回の議事録見ても、こんなのもあるんだと思うし、これまで、こっち来て仕事でいろんなものをしてたらもう藍の話はすごい、「あわ文化」というのはすごいな。それから遡って行って、司馬遼太郎さんの「阿波紀行」を読んで、こういう歴史があるのかって遡ったり、もちろん人形浄瑠璃の話もそうですけど、本当これまで私自身が参加させてもらってる団体でさえそれだけの数ある、いろんところで話をしてくれって言われて行くけども、そこで言ったことが、どこかで進んでいるかと言ったら全くそう思えないんですよ。

変な話、私、このお話いただいたときも、そういうことを言いたくて、ここにきたんですよ。別に皆さんの足を引っ張るつもりもないし、前に進んでいただきたいから言ってるんですけども。

だから、知事自体も色んなこと考えてるし、「VS東京」の人で、本当にいろんなキャッチフレーズを作って、それでぐいっとつかんで行くのはいいんですけども、今やることが本当に整理統合できてるのかなと。今、主体の事をお伺いしたのは、いざじゃあこれで皆さんでまとめていいものができたとして、じゃあ文化振興財団はどうなるんだろうとかだとか、たとえば社会教育でやってる事とかどうなるんだろうとか、じゃあ文化の森の位置づけどうなるんだろうかって、全くそのあたりのプランが見えないんですよ。本当に徳島の文化を担っていく人たちが誰なのか。

それで、ここに書いてるものをそのまま進めていくとしたら、その担い手として、一番先頭に立ってもらいたい人は誰なのかというのが、正直僕には見えてこない。この一年数ヶ月の間では見えて来ない。

今、私の持ってる徳島と文化という二つのワードをくっつけるとしたらくっつかないんですよ、いいもの持ってる、個々に良い活動もしてるんだけど、確かにそれを統合して何らかの形にしていくのが、なかなかそこが一筋の光になって見えない。

もちろんこの議論の中で、これがそれを担うのはここなんだっていうような形でこれが打ち出されていくというのであれば、ものすごくいいことかなと思いますし、さもさりながら、私自体は文化は夏炉冬扇で本当にその状態を愛する人が居続けることが文化なんだと、眉間にしわよせて考えるのは文化じゃないと僕は思ってるし、そのためにたくさんお金かかるのも文化じゃないと思ってる。

だけど、やっぱり文化をつないでいくにはお金が必要だということも理解してますけれども、だからそういった中で、本当に誰に担ってもらうんだ、どこが責任持つんだ、どこが今あるものを全てまとめていくんだという視点を、いろんな議論の中で、大事にしていなければなという思いであります。

(会長)

今のお話の中の前段階として、どういう組織が、どういうことをやってるのかということが、まず県民の目に触れるということが最初の段階じゃないかと思うんですよね。そういうことをまずやらなくちゃいけない。それができると、その次の段階として、お互いのインタラクションとか統合したものが生まれるという、そういう方向が打ち出せてくるんじゃないかなと思いますが、大変貴重なご意見ありがとうございました。

(委員)

先ほど、いろんな例示で伝統文化、農村舞台とか襖絵とか人形浄瑠璃とか出していたいてありがとうございます。なんて言ったらいいんだろうな。色んな団体が色々頑張ってる、今も後継者の育成であるとか、先ほど委員からおっしゃっていただいた、どんな事業を、何やってるか届かないというのは、もう主催してる団体、私たちもそうなんですけど、逆にどうしたら届くのかという思いもいつもあるんです。チラシをお送りしたり、ホームページに載せたりだとか、色んなことをしてますけれども、逆にそれがどれだけ届いているのかというのは、いつもこちらも不安なんですよね。

イベントする度に、今日はどれくらいの人に来てくれるだろうという不安感を抱きながら、いつも色んなことはやってます。逆に本当にどうしたら届くのかということも教えていただきたいですし、色んなこともやっていってますし、もう本当に、ああ、そういうのも、やったなというのは、今も思いながらお伺いしてたんですけれども、それで新聞記事で、事業が終わって記事が載ると「こんなんどうして言うてくれんかったん」って、よく言われるんですよね。新聞記事も事前に出してもらったし、ホームページも載せたし、チラシも送ったし、今度どこまで送ればいいのか。各個に送るわけにはいかないし、というか、地元のイベントなんかは、今、ポスティングで各個配布もしてますけれども、それでも届かないもどかしさ。どれだけ届いているのかというジレンマというのは、今すごく抱えてるし、この視点4の「文化と経済の好循環」はすごくいいことだろうと思うし、ずいぶん昔なんですけど、河合隼雄さんが文化庁長官だった時に、文化が経済を動かすんだ、文化を担う人たち、文化に携わる人達はそれで経済を動かしているんだという視点が絶対あるんだということを、いつもおっしゃってたんで色んな方にはそういうふうな言うんです。

絵を描くのであれば、油絵の具も筆も要るだろう、キャンパスも要るだろう、でそれ

で循環するではないか、個展するんだったらそれで、会場費が入るではないかというか、そういう視点を持ってみんなが考えていくことが、みんなの心の中にないと「文化は贅沢だ」とか「好きでしてるのに自分で全部しろ」というようなことをおっしゃる一般の方もおられるんですけれども、そうではないと、やっぱり経済の一翼も、微々たるものにしても担っているとうことを知っていただきたいという思いは、ずっと今までも抱いてたんですけど。とりあえず今のところはそんなところですよ。

(委員)

ここまで企画を練られて、こういうような形にするまでに、どれほどの努力があったのかということが一番に感じました。

私は最近、東京の若いマスコミ関係で活躍している人が、「マチ★アソビ」を見学に来てその感想を言っておられた例を紹介させていただきます。若い人たちが素晴らしくムードを醸し出しているんですけども、街全体が盛り上がっていないと言われました。いろんなお店があって、若者が動くんですけども、その一つ一つの店も一緒になって盛り上げていこうと、その店に入ってもこんな楽しいことがあるというような、街全体が盛り上がっていないのが惜しいと言われました。そこをどうやって、街全体が盛り上がるかというところに目を向けて行かなければ、発展がないだろうとも言われたので、なるほどなと思ったことがありました。

もう一つはこの前も自分のことを申し上げたんですが、「阿波の歴史を小説にする会」で、第3回阿波の歴史小説の読書感想文のコンクールの表彰式をいたしました。優秀賞の4名の中で、徳島県内の方が二人と東京在住の方が二人、ちょうどそんな形になりました。そこで、東京の入賞した人に言われたんです。徳島には、こんなに素晴らしい歴史があって、本当に自分は徳島出身であるということに誇りをもてる内容であった。もっと徳島県に住んでいる人が、もっと知らないかんでないでと言われました。もっと知ったら、もっとたくさんの方が読んで、もっと多くの感想が寄せられるだろうって、「徳島の人は何しよんでと思うんでよ」と阿波弁で、長いこと東京に居る人から言われました。

最近あった2つのことですが、本当にこのことが、私には今、心に残っております。素晴らしい案が出てきたんですけども、キャッチコピーのような文句も、たくさん工夫して作って下さったんですけども、「未知なる」というのが、赤文字で書かれております。私この「未知なる」という言葉、「未知なる」といえば、普通この紙を見ないで想像したときに、未知なる恐怖とか、未知なる衝撃とか、そういうものが浮かぶんです。「未知なる」というのは、まだ知らないということですから、そういうまだ知らない「未知である」ということを言いたいから、「未知なる」にしたんでしょうけれども、この「未知なる」のイメージは、私が言ったように未知なる衝撃、未知なる恐怖というように、ちょっと怖い方に向いて行くんですね。それが「なる」を「への」に変えますと未知への憧れとか、そういうふわっとした感じになると私は思いました。「未知なる」というのはちょっと硬いし暗い。「未知への」が明るいというイメージを持ちました。

それともう一つは、みんなよく似ていて覚えられない、とにかくそこのおばちゃんでもそこ的高校生でも覚えられるようなキャッチコピーがいいんじゃないかなと。そして

みんなが、子供たちが遊んでいても、それを口に出して言えるようなぐらい、県民が一つになれるようなキャッチコピーが欲しいなあという感じがいたしました。

(委員)

視点1のところですけども、県民みんなで作るということ、大事なことだと思いますし、これが一番に来るのは当然かなと思うんですけども、県民主役と言えばそうなんですけど、全ての県民一人一人が主役になるという思いを、もっと大事にしていかないとダメではないかなと思うんです。

これは釈迦に説法のような話で恐縮なんですけれども、最近の文化法制だとか、文化に関する公文書なんかを見ておきますと、社会包摂という言葉が出てきます。これはご存知のように、芸術や文化と言うのは一部の愛好者とか特権階級のものではないと、全ての芸術文化というのは、みんなが共有する万人の権利であるというような話ですけども、県が作った平成18年3月の基本方針、こちらにも「誰もが文化に親しめる環境づくり」というのがあるわけです。

繰り返しになりますけれども、ホールに来たり、図書館に足を運んでくれたり、あるいは美術館に来てくれたり、イベントがあったら来てくれる、そういう人だけのための芸術文化ではあってはならん、そういうことなんですよね。だから、障がいの問題だとか、あるいは経済的な格差、あるいは高齢者というようなことで、そういう場所に出てこれないような、いわゆる一人一人の県民の皆さん方に、どう芸術文化に親しんで、身近に感じてもらうかということが大切になってくると思うんです。

そういう意味では、県立図書館の移動図書館や移動美術展、あるいは目の不自由な方に彫刻に触ってもらえるような彫刻展、まさに今、徳島公園でやっている彫刻集団の野外彫刻展なんていうのは、本当に文化芸術というものを皆の前に出しているなど。来てくれる人達だけを待つというのでは、これからの芸術文化というのは、一人一人が主役になっていけないのでなかろうかということ強く思うんです。

そういう事でちょっと手前味噌で恐縮なんですけれども、御配布のチラシにもありますように、言葉が適切じゃないかも分かりませんが、日頃、芸術文化に親しむ機会の少ないような方々にも、こういうアウトリーチだとかワークショップなんかを通じて、皆さんともに文化に親しんでもらう、そういうことが県全体の底上げになるし、一人一人の県民の意識の中に芸術文化というものが浸透していくのではなかろうかということで、いろんなところへ私たちも行かせていただいて、あらゆるジャンルのものを、理解していただくように努力しているということで、PR失礼いたしました。

(委員)

この視点、5つとも、前回の意見を踏まえて、本県の芸術文化をこれからますます活性化させ、強力に推進していくために重要な視点ばかりであると、さらにこれを見ながら、私は高等学校の文化連盟という立場で参加させていただいておりますけれども、高等学校の文化を活性化させていく上でも、これら5つというのは、本当に全て重要なところであったり、あるいは関わりのある視点であるなという思いをしたところです。

少し私の経験談を話させていただけたらと思うんですけども、平成27年に私、前

任校である那賀高校に赴任することが、平成26年度末27年3月に決まりまして、教育長から、那賀高校へ行って来いというような指示を受けました。

その際に、那賀高校では、今度、人形浄瑠璃部と、それと従前からあるカヌー部を中心にして、高校生の力で地域を活性化させる授業を、教育委員会の文化課と体育学校安全課の二つ課のコラボレーションによって行う事業をやるから、そうしたことを、那賀高校を核にしながらかつ那賀町の地域を活性化させてくるようにと。

そしてまた、その時にもう一つは、森林クリエイト科という林業に関する学科を創設するので、それを軌道に乗せて来いというのが、教育長からの命でございました。

そして、行ってみますと、人形浄瑠璃部が発足するその前年、私が行きます前に同好会が発足しておりまして、私が行きました平成27年度から、部に昇格させてと言う急造で作ると言うような状況でした。

しかしながら、赴任したときには、生徒が前年から入っておったり、あるいは27年度に入ってきた生徒も半分ぐらいおりまして、6名ぐらいが、傾城阿波の鳴門を一生懸命練習をしているところでした。

そして、地域的那賀町の方も、農村舞台が7箇所ぐらいだったと思うんですけども、それぞれ日曜日等に、各農村舞台で順繰りに公演をやると、そうしたところに徳島出身の勘緑先生が、主に木偶舎で来てくださって、指導もしてくれているんです。それで農村舞台での人形浄瑠璃部が、最初はもうちょっと紹介のようなもの、あるいはだんだんと回が進んでいきますと、傾城阿波の鳴門のちょっと触りのようなところをやらせていただいたりしたわけです。

その時に思ったことは、一つは、人形浄瑠璃という素晴らしい伝統芸能が、この那賀町の山奥に脈々と受け継がれているんだなど。町の中には、清流座という若い人たちを中心にした座がございましたが、そちらの方も指導もしてくれていたんです。

けれども、ただ、それぞれの農村舞台というのは、収容人数も100人ぐらいで、観客の方々は、ほとんど地域のおじいちゃんとかおばあちゃん、あるいは徳島市内とか遠方から来ている方でもやはり高齢の方が非常に多い状況で、小さな時に人形浄瑠璃を見たことがあるとかいうような方々、観客に中学生や高校生、大学生という若い人が、自分がやるような人は来ているんですけども、ほとんどそうした観客はいないような状態でした。

そこで思ったことは、人形浄瑠璃、素晴らしいものがあるんですけども、若い方にはなかなか理解が、伝統芸能に対する理解が進みにくい部分があると、そしてまた学校の中でも部員獲得に非常に苦勞をいたしました。

単に、「しない?」「やらない?」「しましょう。」というような声かけをしても中々入ってくれません。それから、那賀町の方では小学校の時にやったことがあるとか、あるいは淡路から来ていた生徒も、淡路の方はもっとももっと本格的にやっておりましたので、できる子が来ておったんですけども、一回経験したような子でもなかなか入ってくれないという悩みもございました。そんな思いを持ちながら、大阪の県人会が呼んでくれたり、町等色々な支援をしてくださったり、県教委の方ももちろん支援していただいたんですけども、今は那賀高校の人形浄瑠璃部も、部員もそう大勢ではないんですが、6人ぐらいは維持しながら活動は続けているという状況でございます。

あと人形浄瑠璃部は、小松島西高校の勝浦校と城北高校にあるんですけれども、中学校は新野中学校とか川内中学校とかにあるんですが、そこらもあまり増えていないのではないのかなと思う現状です。

ですから、あのときに県教委の方で授業を組んで、そしてやっていただいたことが今の那賀高校に繋がっておるように思いますので、半強制的な部分はあるかとは思いますが、やはり若者がどんどんと向いてくるというようなのは、中々難しいところもありますので、若い人材の育成というのが視点2にありますけれども、この辺りかなり苦労すると思います。

伝統芸能、伝統文化を本当に伝承させていく。本校においても、軽音楽部は入るなど言っても30人も40人も、人数制限しますというくらい生徒が集まるんですが、邦楽部は6人や7人の段階からスタートするという現状もありますので、そうしたところを若い世代に、伝統芸能等を理解をしてもらうには、やはり波状攻撃でどんどんと多く、そうした良さを伝えていく必要があるのではないかと思います。

また、「4大モチーフ」の一つとして、阿波人形浄瑠璃ももっともって発展させていかなければいけないと私も思うところなんですけれども、色々そういう部活動、それから人形も色々お金がかかりますので、そうした支援もしていただかないといけないのではないのかなと。私もよくは承知しておりませんが、かなりお金がかかると思いますので、そうしたところを県の方からも支援をいただきながら、各校に伝統芸能の部活動がどんどんと出てきてくれば、芸術文化が強力に発展していくのではないかと思います。

(委員)

芸術推進基本計画の視点の方から見ていきまして、まず1の「文化力の向上」という部分があると思うんですけど、この視点が5まであるうちの1が一番重要かなと思って、並列な感じで視点5というようになっておりますけれども、大元の「文化力の向上」というのが、まず徳島県にとって大事なんじゃないかと、この計画の表を見て感じたところでは。

地域に根ざす文化の力を、交流人口・関係人口の拡大に起爆剤として利用するとか、視点3の方にもありますし、視点5の方にも「4大モチーフ」をはじめとするレガシーを発信するとかというのがあるんですけれども、これはもともとの文化力の向上なくしてはこれは成り立たないと考えるところです。

特に、先ほど委員おっしゃったように、若い方の文化力の向上が喫緊の課題であるかと思っています。やっぱり子供さん、小さい時とか学生、二十歳ぐらいまでの間に文化に親しむとか鑑賞、体感の機会、発表の機会を持って、文化を自分で楽しむような県の政策をしていただけたら、全てにつながると考えています。

ですから視点1の「文化力の向上」は、特に重点をおいて、計画に盛り込んでいただけたらなと思っております。

(委員)

前回、1回目は文部科学省のヒアリングが同じ日にあたり、どうにもできずそちらに

行かせてもらいました。すいませんでした。

今日は、委員の先生方、また担当の職員の方々、色々ご苦勞されて徳島県の文化芸術をいかに交流させているかということで、提案ができたと思います。

やはり大学でもそうですけども、伝統文化というものに対して、若い人が理解があるかということ、うまくいかないのは事実であります。そう言いながらも、阿波おどりだとか、そういうものに関しては、若い人も部活動として入ってきたり、サークルとして活動しているし、またお遍路、私、遍路にちょっと関わらせていただきまして、遍路も大きいものですと100人規模で参加があって、皆さん歩かれますが、その中にいろいろと、例えば、阿波三盆糖の原料となるキビが植えられているかいないかを確認するとか、そういう食文化の特質を、地形とともに学ぶような、歩き遍路を行いながら、地理学とかそういうのも流行っています。それでやはり一つは、現代の若い人たち、また多くの人たちが、どのような文化、特色を求めているのか、そのニーズは必要かなど。そのニーズに即して、伝統文化の本質を変えず、しかし、それをいかに、どのように取り組んで、新しい創造的な物を作れるのかということが大事なかなと思うんですね。

我々も学生に対して「これをやれ、あれをやれ」と言ってもニーズがないと、なかなか寄ってこないという事実がありまして、今言いましたように、軽音に集まるとかそういうこともありますし、また、ダンスでも創作ダンスからストリートダンスにいたりする。そう言いながらもやはり文化を支えて行くためには、創造的な活動というのが必要かなと感じてまして、お遍路もそういう形でどのように取り組んだら良いのかということを考えて、そういうところで、モートン先生とも、海外に発信する中でどういことができるのかということも話したり、時代のニーズに即さないとかやっぱり入っていないかなど、そういう中で文化を形作っていくと、多くの方が興味を持っていくのかなという感じがします。

それともう一つは、やっぱり発信だろうと思うんです。今、委員の方もおしゃったように、色々企画しても、一般の隅々まで行き渡っているのかということです。その発信が十分でない。県内の担い手の人々への発信もあれば、そういうイベントをむしろ県外にも発信していくことも大事なかなと思うんです。やっぱり、皆さん非常に誠実に色々文化を支えてこられている人がたくさんいます。

人形浄瑠璃とか、そういうことをお聞きして、みんな苦勞されている中で、しかしそれをどのように見える形で、そのよさを地域の人々に発信し、また県外の人に発信し来ていただけるようなものにするか。インパクトのある発信の仕方ってどんな形でできるのかという、その辺を考えていきたいなと思っております。

それとやはり、文化というのは地域の個性だろうと思うんです。だから神山で色々やっているし、那賀川町でそういう取り組み、徳島の中のそれぞれの地域の個性、祖谷だったら祖谷の個性、それを全面的に出していくような時に、どういう文化が重要なのか、県内全部一辺倒ではなくて、やっぱりそれぞれ個性があって、それを連携させることによって、巡回型の観光にも結びつけていくことができるだろうと思ったりもします。

私自身も、四国遍路などに関っていく中で、どうやったらいいのだろうか。世界遺産ということを含めて、視点を考えながら県の方々ともご協力させていただきながら進めていますけども、そのような感じがします。

(委員)

先ほどから、発信という事を皆さんおっしゃっているんですけども、ちょっとそれで思い当たったことを喋らせていただきます。

今年の1月だったかと思うんですけども、県がされた事業で「藍の景色」というイベントがありまして、前の夏、その前年の夏にワークショップがあって、そこで徳島の藍で染めた布、それぞれが染めた布を、特製の光が入る箱に入れて半年ぐらい自分のそばで寝かせて、それを県がまた集めて、アメリカから来られたアーティストの方が、一つの大きな作品に仕上げて文化会館のホールで展示するというイベントがあって、新聞やメディアでもたくさん取り上げられたので、皆さん目にされたと思うんですけど、私もそれに参加しました。

私はたまたまその主催の方から聞いて「参加させてください」って言ったんですけども、「どういった方法でこれは告知されてるんですか」と聞きましたら、SNSのみでの告知です。それで集まるのかなと思いましたが、世界中からアクセスがあってあっという間に枠が埋まりました。

1月のその作品の展示がされたところには、自分の布がどういう風にその作品に参加されているかを見に、海外からたくさんの方が見えられてました。それですごいなと思ったんですけども、それはそういう発信の仕方がすごく的確で、うまくいった例だと思うんです。イベントによって発信の仕方は色々あると思うんですけど、これは素晴らしい発信の仕方だなとその時に思いました。

それとは別に、私、合唱連盟の事務局をしまして、再来年ちょうどオリンピックの開会式の日徳島で「おかあさんカンタートin徳島」という全国大会を行います。全国から女性が集まってくる大会の企画を、今練っているところなんですけど、その視察のために今年の夏に仙台に視察に行ってきました。仙台のホールを色々見て回ってましたら、10ページぐらいのA4のカラーの冊子がありまして、何だろうと思って見てましたら、多分、毎月出してるもので、そのホールだけでなく、県下の主立ったホールの、その月の主立ったイベントが網羅されている。

細かいものではなくて、たぶん今月のピックアップみたいなのをいくつか、それにインタビュー記事等を交えて、読み物としてもコンパクトにできていて、ホールに行くためのアクセス、何に何時に乗ったら行けますよみたいなそういうガイド、それからその各会場の近くにある観光の見所みたいなのところも、全部その一冊に網羅されていてすごくいいなと思ったんです。そのホールだけでなく、県下のいろんな公共施設等に置いているんですよというようなことをお聞きして、これはいいなと思いました。

私、普段は印刷等の仕事をしているんですけども、徳島でも気にしてそういうのがあるのかなと見ているんですけど、なかなか、たぶん県等がそういうものを発信しているのだと思うんですけど、あつたらすいません、私は目にしたことがないので、あつたらいいのになと思いました。観光、食べること、見ること、文化を体験すること、そういうのがひとつにまとまったもの。

インターネット、私も普段は使います。インターネットでも、求めれば手に入る情報なんですけども、そういうものを使わない方にも、パッと目についてそれ一冊あれば、

今の徳島の文化がわかるみたいな、そういうのがあったらいいのにな。徳島でもこんなものができたらいいのになと思って帰ってきた次第です。

(委員)

私、四国大学に、「藍の家」という藍染めの専門の施設があるんですけども、そこで生活化学科の准教授として働いております。この会には「藍の家」が、徳島県藍染研究会の事務局も兼ねさせていただいておりますので、徳島県藍染研究会として参加をさせていただいております。

前回、休ませていただいておりますので、あまりうまくまとめてお話が出来るか分からないんですけども、この視点の中で、「文化力の向上」ということで、前回の議事録にもありましたように、本当に子供達であったり、一般の人でもなかなかその場に行くことができないとか、参加できないことが多いということがあったと思います。

先ほど、佐藤委員から、移動してこちらから出かけていくというようなお話がありまして、私も同じような事を考えておりました。

やはり、文化を感じていくというのは、自然と身についてくると言うか、自分の普通の生活の中で気づいていくことが一番根付いていくことになるのではないかと思います。学生も、自分たちが美術を勉強しているとは言いながらも、なかなか何かレポートに書くから見ておいでというような形で言わないと、自分からなかなか出かけていかない。

すぐネットとかそういうもので資料を集めて、実際の実物を見に行かないということがすごく多いので、知らないうちに本物を近くで見ているというような状況を。

学校単位でしたら、私なんかは小学校の頃なんかは、給食の時間にはそのときに音楽が色々流れていたりとかありました。その時のジャンルとして、邦楽であったり、クラシックを、あえて今月はこの音楽を聴いてみましょうというような習慣を作って流してみるとか、それから、美術室なのか学校の玄関ホールになるのか、そういう所に絵を置くとか彫刻を置くというようなことをして、自然と毎日通っているところで「あっ何か今日新しい、何か綺麗なものがある」というようなものを、ちょっと気付かせてあげるような仕組みみたいなものがあれば、小さいときに慣れ親しんだ音楽であったり音というようなもの、またそれを出す実際の楽器がそばにあるり、触れたりすることがあると、その後の興味に繋がっていくのではないかと感じました。

藍染におきましてはやはり、後継者不足とていうこともたくさんあります。染めをしたい方は実際増えておりますし、アマチュアの方もたくさんいらっしゃいますけれども、その後、作家として職業として食べて行けるかというところ、それはかなり厳しい道でもありますし、大学でも今、授業の中で、藍を一から、種から蒔いて染色してものにするところまで、一連のことはしておりますが、私が20年ちょっと務めておりますけれども、一人立ちして作家になっている卒業生は1名です。

あと、今朝、城西高校に別の用事で伺ってたんですけども、城西高校は元は農業が主体でしたけれども、今、六次産業化ということで県からも補助をいただいて、高校生が畑をやり、すくもも作って染めて、商品を作るというところまで、また、海外に売るということの体験まで、一連のことはしております。ですけれども、実際その後というのがないんですよ。

その後、藍に関する仕事に就けるかということになりますと、その道は、自分で起業するしかないというような現状になってます。文化として体感して知るということはできておりますけれども、その次の段階の所に行くまでには、なかなかないのが現状かなと思っています。

すくも作りをする人が少ないので、地域おこし協力隊等たくさん入られてはおりますけれども、結局、今地域おこしから卒業して残っている方というのは県外の方で、徳島でやりたい若者、徳島の人が育ってないのが現状ではないかと思えます。県外から興味関心のある方がおいでて、残ってやっているという感じだと思いますので、やはり徳島の人が自覚を持ってそれを継いでいく、継承していくということが出来る体制というものも必要ではないかと思いました。

(委員)

もうすでに多くの方がいろんな良いことをおっしゃっていたんですけれども、それに少し付け加えさせていただきます。

発信ということをおっしゃっていた委員が多かったと思うんですけど、それは非常に大事だと思います。5番目の阿波文化ブランドの発信のところで、発信に何が一番大事かという、やっぱりイメージと言いますか、インパクトを持ったイメージで発信できるかどうか、そこで徳島は損をしているのではないかなという気がします。

思い出してみたんですけど、結構、隣の香川県は上手だなと、「うどん県」が最初のものすごくインパクトがありました。今日から「うどん県」にしますというテレビCMは非常にインパクトがあったのと、少し前に車を運転して、ふと前を見ると、徳島でバスが走ってたんですけど「うどんだけじゃない香川県」と大きく書いて、徳島の街を走っている。それとだいたい前ですが、高松駅に降りると、空海とうどんを一緒にして「うどん、食うかい？(空海)」という、そういう本当にうどんだけじゃんみたいなところを逆手にとって、そういうイメージを発信している、それはある意味うまいんじゃないかなと思いました。

今多くの方がおっしゃってましたようにテレビというメディアだけでなく、SNSでも発信することができますので、何かここで発想の転換というかそういうものを、もう一度発信の原点に戻るといっても必要ではないかと思いました。

「あわ文化」というところの「阿波」をひらがなにしたことには、きっと意味があると思うんですけども、これが外の人に対して徳島の文化と思ってもらえるのか、字で見た場合だけですが思います。

それと、ちょっと悲しい寂しいことではあるんですけども、魅力のある県とかそういうもので、四十何位になってる。ならそれを逆手にとって、何かできないでしょうか。見ないふりをするのではなくて、居直ってしまって、マイナスをプラスに変えることができると思うので、何かできないかと、何か私に案があるわけではないんですが、そこでむしろ何か発想の転換はできないものかと思えます。

発信というのは外へだけでなく、中へにもなることだと思います。先ほどから若い人たちのことが出てきておりますが、私自身も学生に常に接している大学で話をしている、やっぱり県外の大阪とか神戸とかに羨望の眼差しを向けている学生がどうしてもか

なりいます。その学生たちに、徳島の地域教育は大事だよとか徳島を見ようよと、そういうことをいくら教員が言っても、学生が自然に自分からそう思わないと、それは根付いたものにならないと思います。

そうすると、その発信も内に向けての発信にも繋がるとも思いますので何かそういうところを考える必要があるんじゃないかとも思います。先ほどのイメージにも繋がるかもしれませんが、「マチ★アソビ」の時に、せっかく県外からたくさんの若者が来てくれていて、街の盛り上がりは今一歩だったと、それはLEDアートの時にも思いました。これだけのLEDアートがあるのに、なんでもっと盛り上がらないんだろうと、私自身も徳島で生まれた人間ですので、東新町商店街の寂しさには本当に、シャッターを閉めていることそのものがマイナスです。仕事の関係でイギリスに行きますが、ロンドンのインスタンドなんかですとシャッターに落書きではないんですけど芸術的とも言えるような絵がいっぱい書かれています。それでみんながインスタグラムで写真を撮ってます。世界中から人が来て。ひとつのオシャレな街みたいになってます。シャッターを閉めただけではもう寂れているというイメージしか抱かないと思います。そこで、もう閉めているものを利用して何かするとか、何かそういう発想の転換をすることが出来ないかなというようなことを思います。

文化は、特別なものとか伝統的なものとか作らなくちゃいけない文化もありますが、他の日常の中にも、根付くための文化というのは、もしかしたらいっぱいあるのではないかと、日常の中にあることを気付かせるそこからクリエイティブなものも生まれるかもしれません。

結構、先ほど軽音に惹かれる学生さんが多いということを書いてましたが、徳島の軽音、なかなかのものなんだということを学生を通じて思います。丸山純奈さんとかも全国的に有名ですし、米津玄師さん、あの方も150万ダウンロード数があったと、この前も徳島にいらしてましたが、それを利用しないというか、ご協力を仰がない手はないのではないのでしょうか。

四国大学のことで申し訳ないんですけど、四国大学ではLEDの猪子さん、柴門ふみさん、そういう方達に特任教授になっていただいています。かなりお願いしました。徳島のためによろしく願いしますということで、お願いすれば、徳島から活躍されてる方は一杯いらっしゃいますので、その方達にご協力を仰ぐということも一つの手かと思えます。

(副会長)

皆さんから、大変深い、そして専門的な立場から、様々な深い内容のお話いただきましてあまり付け加えることはないんですけども、一点論理的な話で恐縮なんですけどさせていただきますと思います。

視点が5つ、これは、いろんな切り口があろうかと思ひまして、これを5つに取りまとめたご努力には感謝したいと思いますが、一回目の議論の中で出てきた話を思い出しますと、若干、視点2の「新たな文化の創造」と、「新しい人材の育成」というのが、おそらくこれ別にした方がいいんじゃないかというように思います。

新しい文化の創造というのは、必ずしも継承とはちょっと結びつきませんし、この前

の議論でもいろんな文化を融合することによって、新しい文化ができるんじゃないか、先ほど、米津さんとか猪子さんの話もありましたけど、そういったものも新しい文化として発信したらどうかみたいなお話も多々あったように記憶しておりますので、ここは、新たな文化の創造というのと、人材育成という部分は分けてもでもいいんじゃないかと思います。それが1点。

2点目といたしまして、視点3、視点4でございますが、要するに交流人口の拡大を視点3、商品開発や観光誘客を視点4で書いてございますが、両方とも文化の活用という意味ではよく似ているのかなと、先ほど大石委員から、モートン・ジョージ先生の話をしてございましたけども、彼は私どもの大学の准教授ですが、インバウンドを観光客誘致して、それを案内することによって阿波遍路に結びつけている、観光客の誘致と交流人口の拡大につなげているという部分でもよく似たことではないのかなと。

5つは5つでよろしいんじゃないかと、4つより5つの方がいいと思いますけれども、そういった形でちょっと論理的に整理した方が、後の整理がやりやすいんじゃないかと思います。

(会長)

皆様方からお話を伺いました。私もこの基本計画全体について、まだこの先のアイデアはあんまりまとまってないんですけど、ちょっと具体的な話ですね。

委員が、どこで何やってるのかわからないと、その一方で、委員や他の皆さんがおっしゃった、発信してるのに伝わらない、何かそこに解決すべき課題があると思うんです。

私、前からちょっと思ってたんですけど、徳島県のいろんな文化団体が、何をやってるのかということがわかる、例えば県庁のホームページでもいいと思うんですけど徳島県文化ポータルというような入り口を作ってね。

(委員)

それ私提案したんですよ。おそらくそれを、文化の森の会合で話したんだけど、それが皆さんに届いていないと思う。つまり、徳島の文化ということで、様々なところでやっていることが、連携がとれていないということだろうけど、それが私のそもそもの疑問です。

私がおそのとき言ったのは、たとえば僕も普段空港を利用してるわけじゃないけど、空港を降りますよね、そうしたら阿波十郎兵衛屋敷の公演時間、どこかに書いてありますか、たとえば阿波踊り会館の開館時間を書いてありますか、それは市の施設だとか何とか言い出したらきりがありませんよ。それは例えば、バスを降りたところに何かチラシが取れるようなボックスあるとか、徳島駅を降りた、コンコースといえるのか分かりませんが、あそこの空間に何かあるのかな。でも、僕、その時そういう話をさせていただいたんですよ。

それでその努力というのを本当にしてるの、するとしたらそれ誰がするの、例えば文化の森であったら、あそこに行くつかあるわけだから、その情報だけでもどうにかならないんですかみたいな話もしましたし、例えば委員がおっしゃったように色々やるのに、なかなか届いていない部分もあるという中で、例えばチラシも、色んなところ

に置いたらいいと思うし、例えば、それこそ県にひとつの窓口があったらワンストップになって、それはもう浄瑠璃のチラシであろうが、美術展のチラシだろうが今すぐに取り込めるわけですから、画像情報として、それで例えば共通のハッシュタグにする。

僕も、「阿波」というのはひらがなより漢字の方が絶対いいと思うんですけど、「あわ文化」というひとつのハッシュタグをつけた共通のものにして、それをインスタでもいいし、ツイッターでもいいし、SNSで拡散してもらおう、それでもいいと思うんです。

つまり、阿波文化のポータルサイトが必要だと思うし、特に四国の東の玄関口ですと言っているのであれば、少なくとも徳島空港、徳島駅、あるいは鳴門のどこかの道の駅でもいいですよ、渦の道でもいいですよ、そこらの徳島に一步足を踏み入れたらどこでこんなものがあるんですというのが、わかる仕掛けが何でないんだろうというのが。

それを通り越して、こうなってくると、僕なんかの頭ではついていけないんですよ。何で、やるべきことやってないのにこういう話なるんだろうって、失礼な言い方かもしれませんが、私もこの仕事以外に一県民として参加した立場でいえば、そう思っちゃうんですね。

すいません。私、日頃からの思いでちょっと言っちゃいますけれども、実はその文化の森の時に、ご存知の通り簡易の屋根をつけたあの劇場、これを作り直してという話をちょうどやった時に、是非とも広報してくださいと言うわけですよ、向こうの皆さんは。広報して是非とも使っていただけるようにと。

僕は、あそこも会議とかいろんなことで何回か行きましたけど、まあ不便ですよ。あれだけのものを揃えるんだから、おそらく昔みかん山だったと聞いたんですけども、じゃあアクセスは誰が考えてるんだろうかと、ものすごく思ったし、例えば、あそこでいい何か展示会やって、徳島市内の中学生、高校生が、素敵な展示会とかやってても、気軽に行けるのかな、便数も少ないのにと、ものすごく僕は思ったし、せっかくあんな劇場をつかって色んなことやってくださいって言うてるのに、あそこには食堂一つしかないですよ。昼の鯖味噌定食となんかナポリタンみたいなので書いた。

僕は、本当に東京国立博物館が佇まいが好きでもうしょっちゅう行って、未だに帰ったら行ってらるんですけども、あそこなんて庭開放してるんですよ。正面の噴水のある広場なんて夏はビール飲ましてるんですよ、あそこで。ホットドッグを売る車が入ってきてるんです、春先もお花見してくださいと、どんどん売れてるんですよ。

僕、その時もその円形劇場屋根つけたら、飲食こんなできないんで、家族連れで来てもらったら良いじゃないですか、何か屋台だとかケータリングの軽トラみたいなのでいいから来てもらうように働きかけたらと言ったら、これでやっぱり限界だなと思ったのは、それやるには保健所の色々手続きもありましてって。

それを乗り越えるために行政というものがあがるんでしょ。つまり、乗り越えるために、県の職員の皆さんだとか、プロフェッショナルの人たちがそれをやろうとしてるんじゃないですか。それを保健所の手続きとかありますので、県の皆さんが蓋閉じちゃったら、じゃあ誰が何をしようというんですかという話なんですよ。

だから、そこらの部分も含めて誤解のないように、それはやっぱり県がリーダーシップを持ってこういうことに踏み切るのは、総論賛成なんですけど、ぜひとも眉間にしわ寄せて予算ぶんどってくるためにやるんじゃない、でもこんなことがあるんだよ、楽し

んだよと思わせて、その中に、皆さんが入っていくような取り組みにしていきたいと思います。

だから、さっき言った子供連れて行って、劇場の方でちょっと面白いショーみたいのもやってる、こっちに行ったら、ちゃんとした展示会やってる。家族連れて来て帰る時に、そこらでホットドッグだとか、ケバブでもいいですよ、なんか軽トラのこういのがあって食べたねと家族が一日楽しめる、それでこそ「文化の森」の名にふさわしいと思うんだけど、今は全然その名にふさわしくない状況だと思う。

そういうことを僕が言ったんだけど、文化を担うこういう審議会の皆さんのところには、変なのに来て何か好き勝手なことやってと、そこで止まっちゃってるんですか。せめてその情報だけでも共有してほしいな。

他の委員もおっしゃったように、写メで担当の方がこう撮って、それをハッシュタグ「あわ文化」で共通にしとけばいいんですよ、それでツイートするその仕組みだけでも整えるだけで、僕はかなり違ってくると思います。

(委員)

ちょっと補足させていただくと、ですから各団体で、若い人、比較的若い人、SNSなんかはできる人。あんまり高齢者だとできないかもしれないですけど、出来る人が来たならその人を広報委員にして多めに、ユーチューブ、インスタグラムとか、どんどんやってもらおうと、結局そういうことをやってる若い人がいればその友達が参加してくるとか、そういうようになると思うので、是非、広報を若い人にお願いするのがいいんじゃないかなと、発信する側としてはね、そんなように思いました。

後、文化振興財団の芸術家の派遣これ大変結構だと思うんですけど、これは要するに病院とか学校とかそういうところに派遣しますよ、っていうことなんですけれどもこれをやっぱり経済と結びつけるには、もうちょっと私的な芸術家派遣業の人がいて、個人あるいはもう仲間内で飲み会やる時にちょっと呼ぼうじゃないかと、まあお金は払う訳ですよ。そういうところまで行くとすごくいいように思うんですよ。

文化振興団体はそういう私的な飲み会に派遣は出来ないのかもしれないけど、そういうのがやっぱり成り立つということが大事じゃないかなと。やっぱり、外国ではいろんなイベントに生演奏の人が参加すること非常に多いです。ですからそういうことを徳島県から初めて、まあ、私的な飲み会でも、あるいは結婚式とかそういう時に必ずなんかそういう音楽の演奏がついてるとかいうふうになんか常識のようになると思うんですけど。

基本計画になかなか行かないんですけど、でも、そういう草の根的な事、一種の文化のインフラですよ、そういうのが整わないとやはりうまくいかないと思うので。

本日は、いろんなご意見をいただきましてありがとうございました。

それでは、一応本日の審議はこれで終了したいと思います。皆様からいただいた意見をまた議事録の形でまとめさせていただきますし、さらには本日ご欠席の委員の方にもご意見を書面等で伺うというようにして、また次回に向けて、基本計画をもっと肉付けしたものにしていきたいと思っております。

(委員)

第38回の近畿高等学校総合文化祭徳島大会でございます。いよいよ10年に1回の近畿2府8県から高校生が集まりまして、チラシ裏面でございますような17の部門が、あわぎんホールなどを主会場として競技をいたしますので、「藍色の空へはばたけ文化の翼」をメインテーマに、2週間にわたってこういう文化祭がありますので是非ご覧いただけたらありがたいと思います、どうぞよろしく願いいたします。